

通級による指導の理解啓発教育を通じた「安全安心な居場所」づくり

—通常学級を対象とした体験授業と通級通信による効果—

千葉市立高浜中学校 教諭 三浦 怜史

《研究の概要》

本研究は、どの生徒にも学校・学年・学級が「安全安心な居場所」となることを目指し、通常学級に対し通級による指導の理解啓発教育を実施したものである。事前アンケートでは、約90%の生徒が、通級による指導が何をしているか「知らない」と回答し、自由記述から誤解やネガティブな認識があることがわかった。体験授業後のアンケートでは、「楽しい」「知る」「わかる」など、認識が変容したと思われる語彙を確認できた。通級通信配付後に実施したアンケートの自由記述からは、認識が定着していることを確認でき、4名の生徒が学校生活を改善するため、通級による指導を参考に行動した。以上のように、本研究は、どの生徒にも学校・学年・学級が安心して過ごせる居場所であり、生徒自身がSOSを出す方法を知るために有効であることが示された。

1 問題の所在

令和6年度千葉市学校教育の課題『21世紀を拓く』で基調として掲げられている、子どもたち一人一人を尊重する「人間尊重の教育」を実現するため、通級による指導を通して、何ができるかを考えた。そこで、課題の一つとして挙げられている、『学校・学年・学級を「安全安心な居場所」とし、好ましい人間関係を築く場とすることにより、安心してSOSを出す方法を身に付けられるようにする』という一文に注目した。

千葉市では、通級による指導を必要とする児童生徒の増加に伴い、第2次千葉市特別支援教育推進基本計画(2024)の中で、設置教室を増加する方針を掲げ、いわゆる「取り出し」による個別支援が受けられる体制を整えてきた。中学校LD等通級指導教室(以下、「通級」とする)に焦点を当てると、平成27年度の2教室31名から、令和元年度には5教室89名、そして、令和6年度には9教室121名へと規模を拡大してきた。眞城(2023)の全国小中学校における発達障害による通級対象者数の将来予測では、令和6年度の1.7%から10年後には9.7%を超え、今後、学校教育における通級の役割は一層大きくなることが予想され、どの生徒にも通級に関する理解啓発教育が必要となるだろう。

国立特別支援教育総合研究所(2012)によると、通級の目的は、「障害の状態の改善と克服」と「環境への適応」にある。前者の「障害の状態の改善と克服」に関しては、市内でも通級担当者間で連携しながら、実

践や研究を積み重ねてきた。その結果、理論や方法が蓄積され、通級に通う生徒(以下、「通級生徒」とする)のニーズに応じた支援を行い、SOSを出す方法を身に付けた生徒を育成する土台ができています。今後は、支援を必要とする生徒の増加を想定し、通級で蓄積された理論や方法を通常学級にも普及させることで、後者の「環境への適応」を後押しする段階にある。また、私は、通級生徒から「通級に通っていることを友達に知られたくない(からかわれたくない)」と言われたことがあり、通級生徒が普段生活する学級内に、通級に対するネガティブな認識があるとすれば払拭するための理解啓発教育を実施する必要があると考えている。

これらの背景から、通級は、通級生徒に対して個別支援を行い、「できた」「わかった」という充実感や達成感を得ることにより、通級に通う意味を実感させる。併せて通常学級に対して、多様な価値観を認め、自身も含めた個性を尊重する態度を育てることで、学校・学年・学級が安心して過ごせる居場所であり、SOSを出す方法があることを伝える理解啓発教育を実施する役割があるのではないかと考えるに至った。

それを実現する研究を目指し、本主題を設定した。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

中学校LD等通級指導教室担当者が、どの生徒にも学校・学年・学級が「安全安心な居場所」となること

を目指し、通常学級に対して通級による指導の理解啓発教育を実施することで、生徒の認識にどのような変容と定着をもたらすのか、その効果を検証した。ただし、「障害」の理解啓発教育においては、通級生徒個人の特性が話題の中心になる可能性があるため、今後の研究で取り扱うこととする。

(2) 研究の方法

研究は、研究Ⅰと研究Ⅱに分けて行った。

①研究Ⅰ 通常学級における通級の体験授業

市内通級設置中学校の通常学級に対して、通級の「体験授業」を実施する。授業の前後でGoogle Formsによるアンケート調査を行い、体験授業による生徒の認識の変容を追い、理解啓発教育の効果を検証する。

ア 研究対象・時期

市内通級設置中学校1～3学年6学級160名を対象に、9月9日～13日の期間に実施した。

- ・通級生徒5名と特別支援学級生徒1名を含む。
- ・当日は欠席者が10名、有効対象者は150名。
- ・特別支援学級生徒については、交流学級で実施。

②研究Ⅱ 通級通信の配付

安里(2024)は、単発の体験授業では、理解啓発の効果が限定的であるどころか、通級生徒の「できないこと」や「苦手なこと」を強調してしまう可能性も指摘している。そのため研究Ⅱでは、体験授業を実施した通常学級に対し、継続的に「通級通信」を配付し、通級の授業内容の紹介を通して、理解啓発教育を実施する。全10回の配付終了後に、研究Ⅰと同様の質問によるアンケート調査を行い、通級通信による生徒の認識の定着を追い、理解啓発教育の効果を検証する。

ア 研究対象・時期

研究Ⅰの生徒160名を対象に、11月15日～1月31日に実施した。

- ・配付日放課後は、通級を一般開放し相談可能。
- ・10号を配付した日にアンケート調査を実施。

3 研究の内容

(1) 研究Ⅰについて

通級の体験授業は、中学校の一単位時間(50分)の授業構成で実施した。本時の趣旨と通級の概要につい

て説明を行った後、通級で実際に行っている授業を行い、最後に担当者として通級生徒の思いを代弁した。

授業の前後で、生徒の認識の変容を把握するため、アンケート調査を行った。体験内容は、コミュニケーションに関するソーシャルスキルトレーニング(以下、「SST」とする)と、発声、活舌に関するボイストレーニングを取り入れた。通級の授業内容が簡単と誤解されないよう、通常学級の生徒も難しいと感じる活動を意識的に取り入れた。

最後に、通級生徒の思いを代弁し、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う、千葉市が目指す『人間尊重の教育』を実現するための体験授業であったことをまとめとして伝えた。

①体験授業の工夫

ア スライドによる構造化、視覚的情報の提示

通常学級の生徒にとって、通級の体験授業は初めての活動となる。そのため、見通しがもてるように、授業内容のスライドによる視覚化と時間配分を提示し続けた。この授業の構造化は、通級生徒に有効であるため、通常学級の生徒にも有効ではないかと考えた。また、一貫してスライドを活用した授業展開にすることで、通級は教科書やワークを使った規定学習の補習ではなく、一人一人に合わせたオーダーメイドの学習が展開されていると印象付けた。

イ ゲーミフィケーション

ゲームの要素やデザインの技術を取り入れることで、学習者のエンゲージメントとモチベーションを高める手法として注目されており(藤川2016)、通級生徒も楽しみにしている。体験授業を初めて行う生徒の心理的な抵抗感を下げ、自発的な参加を促すため、取り入れた。[資料1]は、導入で登場した通級サポートロボットの「Qちゃん」である。AI音声を設定しており、クリックすると授業者である筆者と会話をしているような演出ができた。



なるほどです。では、いつも通級でやってることをみんなに体験してもらおうのがよいですね。

[資料1] 通級サポートロボット「Qちゃん」

②体験授業の展開

ア 事前アンケート

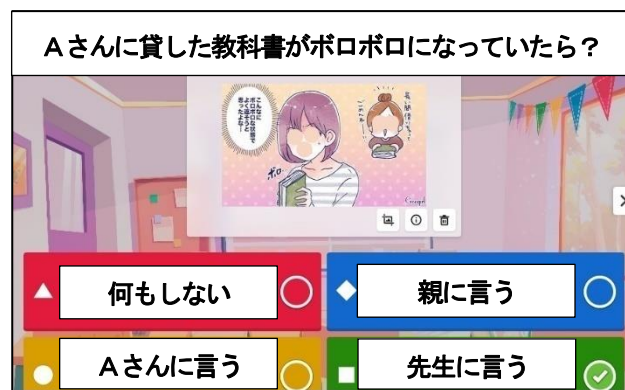
体験授業前の生徒の通級に対する認識を把握するため、Google Formsで「通級が何をしている場所か知っていますか?」を4択で、「通級はどんな場所だと思いますか?」を自由記述で回答を求めた。

イ 導入(通級の役割について)

通級では、生活の中で困っていることがあり「できるようにになりたい」という思いをもった生徒が学習しており、その学習を通して、自分の得意なことや不得意なことを知り、自己理解していくことが大きな目標であることを伝えた。

ウ SST(困り感の認知とその対応力の向上)

日常や学校の中で起こり得る場面を想定した問題を『あたまと心で考えようSSTワークシート思春期編』(LD発達相談センターかながわ2012)の中から選択し、kahoot!(ゲーム型教育用システム)で、10問作成してクイズにした([資料2])。生徒は、各自の1人1台端末タブレットPCから参加できる設定にし、正解数と解答スピードを個人戦で競うクイズ大会を行った。



[資料2] kahoot!で作成したクイズ

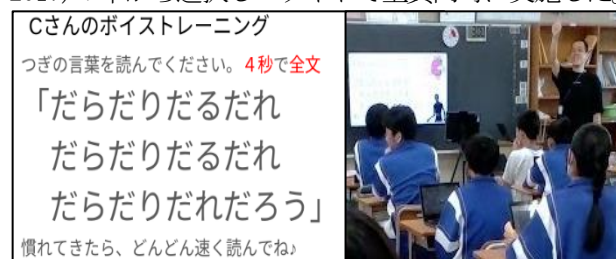
表彰では、上位3名に、「通級ポイントカード」を贈呈した([資料3])。



[資料3] クイズ大会の表彰と「通級ポイントカード」

エ ボイストレーニング(発声、活舌の向上)

[資料4]は、通級生徒がルーティーンで取り組んでいる学習であり、3分間でできる内容を『会話力があがる大人のはきはき「活舌」上達ドリル』(花形一実2017)の中から選択しスライドで全員同時に実施した。



[資料4] ボイストレーニングのスライドと様子

オ まとめ(通級生徒の思いについて)

最後に、通級の担当者として、通級生徒の思いを代弁した。自校の授業を抜けて、一人で通級に通うことは勇気がいることであり、自分の苦手なことや上手くできないことと向き合い、先生と相談しながら、できるようにになりたいと努力している生徒がいることを通常学級の生徒に伝えた。

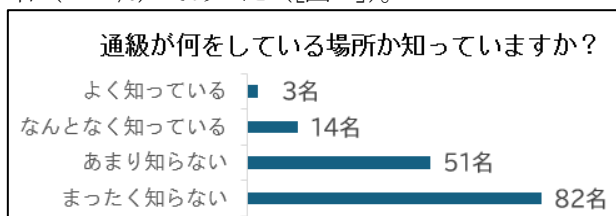
カ 事後アンケート

授業の振り返りとして、Google Formsで「体験授業を通して、通級はどんな場所だと思いましたか?」を自由記述で回答を求めた。

③体験授業のアンケート(事前・事後)について

ア 事前アンケートの結果

事前アンケートでは「通級が何をしている場所か知っていますか?」を4択で回答を求めた。「まったく知らない」「あまり知らない」を合わせると150名中、133名(88.6%)であった([図1])。



[図1] 事前アンケートの結果(150名)

イ 自由記述の分析

分析では、事前・事後アンケートそれぞれの自由記述に注目し比較した。しかし「分析という営みは人間の判断が必然的に含まれる」(樋口2014)ことから、客観性や信頼性の担保が課題となる。そこで、KH Coder

による計量テキスト分析を用い、出現回数の多い語彙から順に示し、体験授業前後での生徒の通級に対する認識の変容を追うこととした（[表1]）。なお、「通級」「教室」「ありがとう」「野球」「三浦」など、認識の変容と関わらない語彙は、あらかじめ除外している。

【表1】KH Coderによる計量テキスト分析

体験授業実施前		体験授業実施後	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
勉強	36	楽しい	48
相談	12	知る	25
遊ぶ	7	思う	23
1対1	5	相談	21
ゲーム	4	わかる	16
話す	4	自分	10
障害	4	行く	7
叱る	4	ゲーム	5
遅れ	3	聞く	5
日本語	3	クイズ	4
悩み	3	トレーニング	4
ペース	3	最初	4
学ぶ	3	イメージ	3
サポート	3	勇気	3
受ける	3	良い	3
自分	3	勉強	3

【資料5】の事前アンケートの自由記述では、総抽出語数684語、有効語数は342語であった。最も多かった語彙は、36回の「勉強」で、「遊ぶ」「障害」「叱る」「遅れ」「日本語」など、誤解やネガティブな認識と思われる語彙が見られた。

- 授業が遅れている人が勉強する場所
- なんかいっぱい遊んでいるイメージ
- 障害のある方が日本語や勉強するところ？
- 勉強についていけなくなった人が叱られてそう
- 日本語の勉強をするところ

【資料5】事前アンケートの自由記述

【資料6】の事後アンケートの自由記述では、総抽出語数1918語、有効語数は700語であった。最も多かった語彙は、48回の「楽しい」で、「知る」「思う」「わかる」など、通級に対する自身の考えと関係する語彙が見られるようになった。

- とても楽しく、わかりやすい場所だと思った
- 最初は通級について全く知らなかったけど、今回の授業で知ることができた
- 通級は学校に絶対あったほうがいい所だと思った
- あまり身近に感じていなかったけど、じつは誰にでも関係あるものかもとわかった
- 通級には勇気があって頑張っている生徒がいることがわかった

【資料6】事後アンケートの自由記述

ウ アンケートの考察

事前アンケートの結果から、多くの生徒が通級は何をしている場所か「知らない」ことがわかった(88.6%)。自由記述からは、通級は様々なネガティブな理由で、勉強が遅れている生徒が通う場所と想像していることがわかった。担当者としての反省になるが、指導時間の中で「楽しみ」も用意したいと考えているため、通常学級の生徒には「遊んでいる」と、誤解を生じさせていた可能性がある。また、「？」の記述が、150人中18人と多く、通級は校内にあるため存在自体は知っているものの、どこか自分とは関係ない場所と認識している印象を受けた。

事後アンケートの結果から、体験授業を実施したことで、通級に対するネガティブな語彙が「楽しい」「良い」「勇気」というポジティブな語彙に変容したことがわかった。体験授業に関わる語彙以外に注目すると、【資料7】のように、「自分」という語彙が3回から10回と多く出現していた。体験授業を通して、自身について振り返り、通級と自分もつながる部分があるのではないかという認識の変容が表れたと考えられる。

- 自分はやりたいことがたくさんあるから通級でトレーニングしてみたい
- はじめに自分の思っていた通級のイメージと全然違った
- 自分のやりたいことがある時に、相談できる場所があると思うととても心強かった
- 自分は通級に偏見をもっていたけど、実際体験してなくなった
- 自分は算盤をやっていたのに、大変でやめてしまった。人生で1番努力した瞬間を思い出した

【資料7】事後アンケートの「自分」と関わる自由記述

また【資料8】のように、自身の困り感を打ち明ける記述もあった。勇気をもって、記述してくれたことを踏まえ、今後はその生徒の思いに応える個別支援を校内で検討、共有し、実施していく必要がある。

- 整理整頓ができなくて困っている
- 話している時に、相手に意味が伝わらなくて「何を言っているの？」と言われたことがあった
- 私は人になかなか相談できないで一人で抱えちゃう
- 私はやらなきゃいけないことを後回しにしちゃうので悩んでいる
- 日本語がむずかしいです

【資料8】自身の困り感を打ち明ける自由記述

(2) 研究Ⅱについて

通級通信では、学校生活に生かせる支援内容の紹介を通して、理解啓発教育を継続的にを行い、生徒の通級に対する認識の定着を図った（[表2]）。

[表2] 全10回配付した通級通信

号	通級通信のタイトル	自立活動6区分27項目
1	整理整頓はできているかな？	環境の把握
2	動画で勉強したいあなたへ	環境の把握
3	同じ100m走でも	身体の動き
4	一回の授業料	生活のリズム
5	忘れ物するのは誰？	環境の把握
6	一生使える？プレゼンスキル	コミュニケーション
7	生成AIの波に乗ろう	環境の把握
8	あなたのプレイクスルーはいつ？	心理的な安定
9	みんなちがって、どうでもいい話	人間関係の形成
10	相手と心のキョリを近づける方法	コミュニケーション

①通級通信の内容の工夫

通級通信の内容は[資料9]のように、体験授業のアンケート記述に対する回答も含め、学校生活で起こる「こんな時、どうする？」といった場面を、通級の指導内容の柱である特別支援教育自立活動6区分27項目から選択した。具体的にどう行動すればよいのかを紹介し、「読んで役に立つ通信」を心がけた。

担任の先生からは「整理整頓ちゃんとやりましょう！」って言われるけど、そのやり方がわからない。じつはそんな人、結構いるのではないのでしょうか？今日は、そんなあなたに「整理整頓」のコツを教えますね！

まずは、ロッカーです。基本は右と左に分けて使います。右側には教科書・ノート・ファイルを掛けて入れ、左側にはカバンを入れるようにしましょう。



オススメは100均一ショップの『A4ジッパーファイル※写真③』もしくは『便利ゴムバンド※写真④』を教科ごとに用意することです。そのままロッカーにも机にもカバンにも入れることができ、とても便利です。壊れない限り、高校に行っても使うことができるので、コストが低いです。見本は通級指導教室にありますので、やり方が気になる人は見に来てくださいね。

※③  ※④ 

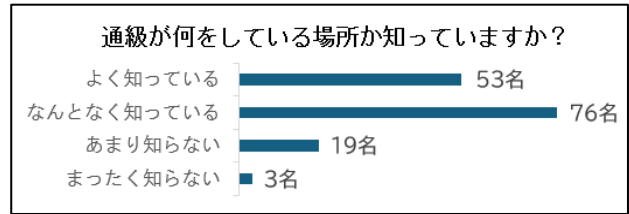
[資料9] 通級通信1号「整理整頓」の一部

全10回の配付後には、生徒の通級に対する認識の定着を把握するため、研究Ⅰ同様の質問によるGoogle Formsのアンケート調査を実施した。

②通級通信後のアンケートについて

通級通信後のアンケートでは、「通級が何をしている場所か知っていますか？」を4択で回答を求めた。

「知っている」「なんとなく知っている」を合わせると151名中129名（85.4%）であった（[図2]）。



[図2] 事後アンケート結果（151名）

③事例生徒A、Bについて

通級通信の配付を始めてから、全10回を配り終わるまでに、8名の生徒が通級へ相談に来室し、4名が学校生活を改善するため紹介した支援を参考に行動した。ここでは、2名の通常学級の生徒を取り上げる。

ア 整理整頓ができるようになった生徒A

生徒Aは、ロッカーとカバンの整理整頓が苦手で、忘れ物や落とし物で、困り感を抱えていた生徒である。

体験授業後のアンケートで記述があったため、1号の通信では生徒Aを想定し、整理整頓の仕方について紹介した（[資料9]）。生徒Aは、自分でジッパーファイルとタグを用意し、写真を参考にしてロッカーとカバンの整理整頓ができるようになった（[資料10]）。



[資料10] 生徒Aのロッカーとカバン

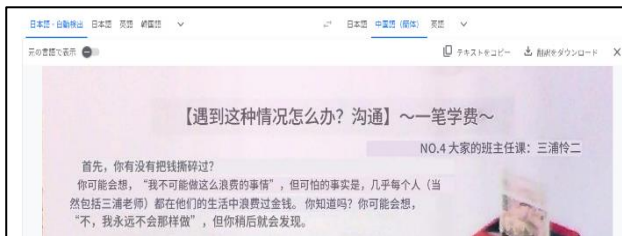
イ 提出物を中国語変換できるようになった生徒B

生徒Bの母国語は、中国語である。本人は、日本語を読み書きできるが、母親が中国語で生活しているため、提出物で困り感を抱えていた。体験授業後のアンケートで記述があったため、5号の通信で教具「どこでもスキャン」を紹介した（[資料11]）。



[資料11] 「どこでもスキャン」

その通信を見た副担任が生徒Bを誘い、放課後に通級へ来室した。そこで「どこでもスキャン」と、Google翻訳の使い方を覚え、母親のため〔資料12〕の中国語に翻訳した書類を印刷し、持ち帰った。その結果、生徒Bは後日、書類を提出することができた。



〔資料12〕 Google 翻訳を使い中国語に変換した書類

④通級通信後のアンケートの考察

アンケートの結果から、体験授業を実施して4か月が経過した後も、生徒が通級は何をしている場所か「知っている」と回答し、認識が定着していることがわかった(85.4%)。自由記述では、通級通信が学校生活の中で参考になるため、今後も継続してほしいという意見や自分の悩みを解決したいという意見が見られた。通級担当者として、普段は通級で生徒を待っている身であるが、通級通信によって通常学級に対し、通級の理解啓発教育することの必要性や効果を感じた。

⑤事例生徒A、Bの考察

ロッカーとカバンの整理整頓が苦手だった生徒Aは、通級通信の写真を参考に「何が正解か?」「どうすればできるのか?」を理解し、行動に移すことができた。この「〇〇したら、□□できた」という経験を積み重ねることで、困り感が生じた際に相談しながら、自分で工夫してみようとする生徒に育てていく。

生徒Bについては、これまでも親子で生活言語が違うことにより、コミュニケーションの齟齬があったと考えられるが、通級通信の配付により、困り感に気付き改善することができた。今後は、Google 翻訳など、日々進化するテクノロジーを取り入れながら、親子間のコミュニケーションが、より円滑に進むことを目指し、校内で連携しながら支援を続けていく。

以上のように、通常学級に対する通級の理解啓発教育を通して、支援が必要だった生徒A、Bは個別支援へとつながり、学校生活が改善したと考える。

(3) 研究Ⅰ・Ⅱ実施後における通級生徒の感想

本研究の懸念事項は、通常学級に対し、通級の理解啓発教育を実施することを通級生徒本人が、どのように思うかであった。実施後、2名の通級生徒から感想を聞いた。「通級はいつも先生と2人で学んでいるから、みんなでできて楽しかった」「通級の良さをみんなに知ってもらえて良かった」という前向きな話を聞くことができ、本研究は、通常学級に対する理解啓発と併せて、通級生徒が通級に通う意味を再認識し、前向きに通級へ通う動機付けになったと考える。

4 まとめ

(1) 成果

体験授業を通して、生徒の通級に対する認識にポジティブな変容があった。また、通級通信を通して、継続的に理解啓発教育を実施したことで、多様な価値観を認め、自身も含めた個性を尊重し、受け入れる認識の定着が確認できた。さらには、今まで支援につながっていなかった生徒A、Bが、SOSを出す方法を身に付け、行動に移すという副次的効果も得られた。

以上の成果から、本研究がどの生徒にも『学校・学年・学級が「安全安心な居場所」となる』ことを目指す一助となったと考える。

(2) 課題

体験授業や通級通信による理解啓発教育の実施後、通常学級の生徒から通級への相談件数が増加し、通常学級の中にも、支援が必要な生徒が複数存在していることが明らかとなった。

今後、千葉市では特別支援教育を推進するエリア方式により、さらに支援の枠を広げていく。生徒はそのままの場所にいなながらも、必要な支援が行き届く体制を学校・学年・学級の中で実現していく。そのための方策を通級担当者として、次の課題としたい。

【主な引用/参考文献等】

- ・真城知己 (2023) 「通級による指導対象者数変化の数理モデル」『発達障害支援システム学研究』第22巻、第1号、11-24。日本発達障害支援システム学会
- ・安里建志 (2023) 「通常の学級における通級指導教室の体験学習に関する実践」『奈良教育大学教職大学院紀要「学校教育実践研究」』第14号、57-62。奈良教育大学大学院教育学研究科専門職課程教職開発専攻
- ・藤川大祐 (2016) 「ゲーミフィケーションを活用した「学びこむ」授業の開発」『千葉大学教育学部研究紀要』第64巻、143-149。千葉大学
- ・樋口耕一 (2022) 『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング』13。ナカニシヤ出版